博学博多

ふくおか深発見 保存版

VOL.163

早良（さわら）王国

日本最古「三種の神器」が出土 弥生の早良平野に繁栄した王国

福岡市の西部に広がる早良平野。中央を室見川が流れ、中流の西岸域にはここに弥生前期末に早良王国が存在していたことを語る遺跡群がある。西区の飯盛山のふもとの扇状地に広がる吉武遺跡群だ。天皇の証しとされる「三種の神器」（鏡、剣、玉）に相当する副葬品を持つ木棺墓が発掘されて話題を呼んだ。紀元前2世紀ごろのものとされる出土品は、日本最古の三種の神器である。ここが「漢委奴国王（かんのわのなのこくおう）」の金印で知られる奴国や卑弥呼の邪馬台国よりも以前にクニであったことを示している。弥生社会の成り立ちを考える重要な意味を持つ早良王国とは？

最古級の王墓が吉武高木遺跡に

1200基を超える甕棺（かめかん）墓・木棺墓が10カ所以上に分かれ、墓地を構成する吉武遺跡群。中でも特に早良王国の存在を印象付けたのが吉武高木遺跡である。弥生前期末～中期前半の60基ほどからなると見られる墓地で、「標石」と呼ばれる墓標を持ち、青銅製の武器や腕輪、装身具などの副葬品がある多くの墓が確認されている。画期的だったのは一つの木棺墓から銅矛（ほこ）や銅戈（か）などとともに銅鏡、銅剣、勾玉（まがたま）のいわゆる三種の神器、しかも日本最古のものが発見されたこと。このセットは多くの古墳など有力者の墓から出土することから富と権力の象徴だとされる。

鏡は直径11・1センチで、背面に幾何学的で髪の毛のように細かい線の造形が凝らされた朝鮮半島製の「多鈕細文（たちゅうさいもん）鏡」という希少品。剣は国内最古の青銅製武器だった。玉は北陸産のヒスイで作られた勾玉と95点の管玉で、糸を通しネックレスとして使われていたと考えられる。これらの品は被葬者が一般人より高い身分で一つの社会をまとめていたリーダーであったことを明確に物語る。墓は「早良王墓」であるとして注目を集めた。

また王墓の近くには「高殿」とされる大きな掘立柱建物跡も確認されている。ちなみに掘立柱というのは、土を掘り、じかに柱を建てる建築工法。この建物は床面積が約120平方メートルと考えられ、弥生時代としては最大級であったともいわれる。一帯で見られるほかの建物は王墓とは反対側の一段低い所に位置していたが、この高殿は一段高い場所にあり、首長の館とも祭祀（さいし）のための施設とも考えられるという。

▲ 吉武高木遺跡。標石を持つ木棺墓、甕棺墓が並ぶ。中段右が鏡・剣・玉を出土した3号木棺墓（1985年）

吉武高木遺跡から出土した「三種の神器」（左から細形銅剣、同、銅戈、銅矛、多鈕細文鏡、碧玉製管玉、ヒスイ製勾玉）写真提供=福岡市博物館

戦死したと思われる被葬者も

吉武高木遺跡と小さな谷を挟んであるのが吉武大石遺跡。甕棺墓など200基以上からなる共同墓地である。高木遺跡と同時代のもので、青銅器の出土数も同じだが、鏡はなく装身具はほとんど埋葬されてない。中には銅剣先片や石剣先片が出てきた墓があるなど戦闘による死者と見られるものもあり、被葬者は戦士階級の人たちではないかとされる。

吉武高木遺跡の西端から見た飯盛山

大石遺跡の北約250メートルに位置するのが吉武樋渡遺跡。高木遺跡と比べて100年ほど新しく、弥生中期～後期の甕棺墓140基などからなる。その一角には北部九州で初めて確認された墳丘墓があった。墳丘墓からは甕棺25基が掘り出され、その一部には重要な前漢鏡や細形銅剣、鉄剣などの副葬品も見つかっている。いずれも中期後半の墓で、それらの品々は一つの墓に集中してはいない。樋渡遺跡の墳丘墓は吉武地区の有力者層の存在を示すが高木遺跡に比べるとその権力は微少だったとされる。

東から見た吉武大石遺跡の発掘風景（1986年）

吉武樋渡遺跡。弥生時代の墳丘墓の上に5世紀初めに古墳が築かれていた（1983年）

弥生社会の成立過程を知るモデル

早良平野に展開したクニについて、西南学院大学高倉洋彰教授（考古学）は「吉武高木遺跡は大きな標石を置いたり、朝鮮鏡が埋葬されているなど、朝鮮半島の文化と深いかかわりがあることを示している。しかもこの早い時期の鏡・剣・玉の同時出土は、これらの3点セットが強力な権力の象徴として表れたことを語っており、まさに日本最古の王墓ならではのもの。大石遺跡はその首長に仕えた戦士クラスの墓で、この時期の早良平野には、身分の上下がありそれがうまく機能する地域社会、クニが成立していたことがうかがえる。この時代の社会を探るのに全国でもモデル的な遺跡群だ。そのことをもっとたくさんの人に知ってほしい」と語る。

今、吉武遺跡から出土した「三種の神器」をはじめとする副葬品645点は国の重要文化財に指定され、一部は福岡市博物館（早良区百地浜）に展示されている。

高倉洋彰西南大教授

「聖なる弥生の丘」歴史公園計画

吉武遺跡群の中でも高木地区と大石地区はその学術的重要性の高さから、1993年に国史跡「吉武高木遺跡」（約4・2ヘクタール）の指定を受けた。その後、福岡市は同史跡の土地を買い上げ、その周辺を含めた地域を「聖なる弥生の丘」をテーマにした歴史公園として整備する事業を進めている。

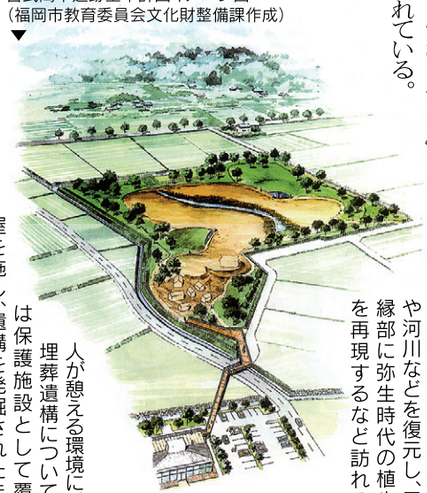
史跡地内に関しては当時の地形や河川などを復元し、周縁部に弥生時代の植生を再現するなど訪れる人が憩える環境に。

埋葬遺構については保護施設として覆屋を施し、遺構を発掘されたままの状態またはレプリカで再現して遺物などの展示や解説コーナーも設ける計画。

野外には帯状に群集する墓群の一部について分布している様子を甕棺ロードとして再現する。そのほか、高殿の再現や吉武遺跡について分かりやすく説明した展示室など複数のガイダンス施設やあずまやの建設などが予定されている。

現在のところ、この歴史公園の完成の時期は未定だが、部分的に復元が終わった所などが暫定的に一般公開される運びだ。日本の弥生史における重要な遺跡だけに、早い実現が待たれる。

吉武高木遺跡墓本計画イメージ図（福岡市教育委員会文化財整備課作成）▼



吉武高木遺跡の高殿復元模型（福岡市埋蔵文化財センター）

※発掘中の写真はすべて福岡市埋蔵文化財センター提供

●参考文献

☆特設展図録「早良王墓とその時代―墳墓が語る激動の弥生社会―」／福岡市立歴史資料館編・刊

☆「九州文化史研究所紀要」37号、弥生時代における国・王とその構造（高倉洋彰）／九州文化史研究施設刊

☆「西区は歴史の博物館」／西区地域振興事業推進委員会編／海鳥社刊

☆「国史跡　吉武高木遺跡整備だより NO1」／福岡市役所刊　ほか

●このシリーズは、大きく変容している博多・福岡をいろいろなアングルで見直し、その魅力の源を〝深〟発見していくものです。次回のテーマは「福岡市美術館」（9月下旬掲載予定）です。この企画へのご意見や取り上げてほしいテーマがあればお寄せください。

●宛先／〒810-8721　福岡市中央区天神1-4-1西日本新聞社企画推進部「博学博多」係

〈企画・制作／西日本新聞社広告局〉